# 神金公民館だより

第162号
2023年
9月1日

# 厳しすぎる残暑

気象庁が発表した1カ月予報（8月17日）によると，向こう1カ月も暖かい空気に覆われやすく，全国的に高温傾向。9月に入っても厳暑が続く見込みとのことです。

さらには，「高温に関する早期天候情報」も発表されました。これは，その時期としては10年に1度程度しか起きないような著しい高温となる可能性が，いつもより高まっているときに，事前に注意を呼びかける情報です。

9月の中頃にかけても厳しすぎる残暑が続くことが予想されている中，長く続く厳しい残暑で体への負担が大きくなっています。十分な睡眠時間の確保や栄養補給など、日々の体調管理を心がけてください。

## ◆神金小からのお知らせ◆

# 芸術鑑賞教室開催

□日　時　　9月8日（金）　13:55～14:50

□場　所　　神金小体育館

□内　容　　ハルモニア管弦楽団の管楽器の演奏

□その他　　○上履きを持参してください

　　○駐車場は校庭を利用してください

※問い合わせ先

神金小（[redacted]）

# 子どもまつり

8月11日，神栄会主催の「神金子どもまつり」が神金小校庭で開催されました。

少子化が進む中，地域で活動している子どもたちが，このイベントを通して子どもたちが主役となり地域の活性化に繋がることをねらいとして開催されました。

小学生手作りの団扇を来賓（市長・県議・市議さんなど）の方々に手渡したり，屋台の店番を中学生が担当したりと，まつりのイベントを楽しむだけでなく，子どもたち自らがイベントの盛り上げ役として活動していました。

# 神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が，神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

## 青梅街道　一

神金を西から東に縦貫する青梅街道（国道四一一）は、甲斐国志によると「萩原口」と称し、又青梅通り、大菩薩越えともある。峡東地方では御坂口（国道一三七）、雁坂口（国道一四〇）と並んで甲州から他国に通ずる九つの街道の一つで、昔から主要道路であった。

慶長八年二月一二日（一六〇三）徳川家康が天下を掌握し江戸に幕府を移したため、江戸は政治経済の中心になった。元和二年（一六一六）江戸を中心に五つの街道をつくった。その中に甲州街道があるが、約二ヶ年余の歳月を費やして完成した。甲州街道が開通してから萩原口は甲州裏街道と称し、人の往来も少なくなった。江戸の方面からの巡礼、甲府の善光寺への参詣人、塩山の湯への湯治客等の外は、狩人や山仕事をする大、人目を忍び世を憚る人や、丹波・小菅方面の人や馬の道となった。

しかし、徳川幕府はこの街道の重要性を感じて上小田原の現在の番屋地内に「萩原口留番所」を設け、往来の監視にあたった。主として江戸に入る鉄砲、江戸から出る女性に重点をおいて監視した。「この関所は上小田原五日、下小田原十日、上萩原上下にて十五日之を衛る」と甲斐国志にあるが、四つの村から選ばれた人が毎日三人から四人宛、武士らしく丁髷を結い、裃姿で腰に大小の刀を差して、えらそうな厳めしい顔をして勤めたそうである。この地の人がこの番所の警護をしたので、石和代官所からいろいろの賦役等の割当てを免ぜられたので一般の百姓は助かったのである。

萩原口の街道のうち大菩薩越えといわれている峠道には、尊い史実と幾多の寓話もあるが、時の流れと共に忘れ去られようとしている。この道は昔から丹波山村、小菅村への生活物資の輸送路であった。昔は小原、八日市場等が物資の集散地であり、小原、八日市場等が物資の集散地であった。しかし、甲州街道が開通してからは勝沼、栗原が峡東の経済の中心となった。当時塩山は於曽と称しあまり賑やかではなかった。

＊次ページに続く

# 神金の歴史

勝沼宿から大菩薩越えの直通は困難のため、小佐手街道から黒川往還（牛奥、下萩原、中萩原、上原を経て神部神社西に出る道）を経て、神金地内にある問屋まで運んだ。明治十一年に青梅街道が開通するまで問屋をしたと思われる家が数軒あるが、小学校上の広瀬四郎さんの家はその内の一件であり古文書も現存している。

文化年間（一八一〇）上萩原上下、小田原上下で約百頭の馬を飼っていたが、大半は大菩薩越えと黒川金山への駄賃つけで働いていたようである。神金から丹波山村までは人の足では往復できるが、馬が荷物をつけて上下六里の山路を往復することは困難のため特殊な取引方法がとられていた。峠から小菅方面に十分余り下った場所に、フルコンバ小屋という処があり、そこは昭和初年頃は荷渡しの小屋といわれていた。その昔は妙見社であった。

中里介山の小説、「大菩薩峠」にも妙見社が出てくる。文中に「この社を市場として一種奇妙な物々交換を行っていた」と書いてある。又、この小説の主人公、机龍之介はこの社のうしろに身を隠し、孫娘と登ってきた巡礼の老人を娘が水を汲みに行ったその隙に胴体を二つに切ったところである。世界一の長編小説といわれた大菩薩峠はここから出発しているのである。この小説が映画や演劇によって全国に紹介されたので、大菩薩に登山する人は土曜、日曜は朝の暗いうちから臨時バスを出しても乗り切れないという状況であった。

昔は丹波山、小菅両村の戸数は約四百戸、人口弐千人余り住んでいた。その生活を支える米麦、味噌醤油、酒、日用の雑貨等は莫大の量であったことが想像できる。これを問屋から馬の背中に乗せて大菩薩の急坂を登り妙見社まで届ける。妙見社には誰も人は居なくても問屋と問屋との約束によって荷物に荷札と送り状がついていれば、丹波山方面の馬方は荷札を見て問屋に運ぶ。神金から荷物をつけて登った馬方は妙見社に荷物を下ろし、あちらの産物である木材、鈴竹、木炭等を帰り荷として問屋に届け、重量によって定められた駄賃を貰う。このような商取引が幾百年か判らぬ昔から行われてきたが、何の手違いもなく天候の都合にて幾日もその儘になっていても紛失することは無かったそうである。このような商取引は全国的にも珍しく無人交易といい貴重な文化遺産である。

中里介山